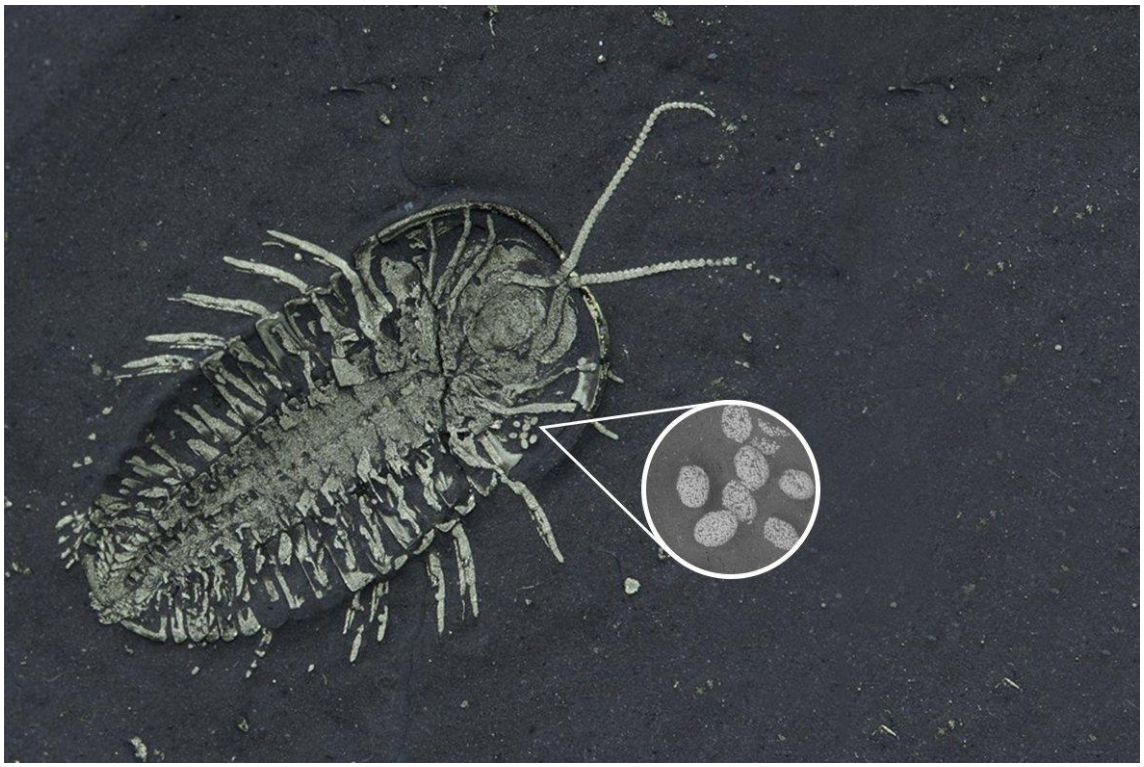
卵のついたオルドビス紀の三葉虫化石の発見

三葉虫は古生代に繁栄した節足動物のなかまで、1 万種以上が知られている。化石の豊富さから形態的な多様性はよく知られているが、その生態については謎の部分が多い。

西イリノイ大学の古生物学者 T.ヘグナらは、ニューヨーク州北部で発見されたオルドビス紀の三葉虫化石(Triarthrus eatoni)の頭部に卵が付着していることを発見した[1]。三葉虫が発見された地層はローライン層群と呼ばれている黒色泥岩からなるもので、三葉虫化石は黄鉄鉱でできており、細部にいたるまで保存状態はよいという。卵の大きさは 0.2 ミリぐらいで、楕円形である。

現生のカブトガニは生きた化石といわれているが、今回発見された三葉虫化石と同様、頭部にある生殖穴から卵を放出することが知られている。三葉虫もカブトガニと同様に体外受精したあと、受精卵を体内に保持していた可能性があるという。



[1] Hegna, T. A. et al. (2017) Geology, 45, no.3, 199-202. Doi:10.1130/G38773.1